

〈近代本論第二十回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1792 ロシア遣日使節アダム・ラクスマン根室に来航
- 1802 勝小吉（～1850）中流旗本男谷平蔵の三男（妾腹）として深川油堀に生まれる
- 1804 ニコライ・レザノフ長崎来航、幕府通称拒否（定信は既に失脚）
- 1807 アメリカのハドソン川にて、外輪式蒸気船クラームント号の進水式成功（商用蒸気船の本格化）
- 1808 イギリス軍艦フェートン号、長崎出島に侵入（フェートン号事件）
- 1815 勝小吉江戸出奔、乞食をしながらお伊勢参り
- 1822 勝小吉再び江戸出奔、剣術を教えながら諸国を回る 江戸帰府後、父親から三年間座敷牢に入れられる
- 1823 勝麟太郎（海舟）誕生（～1899）
- 1825 異国船打払令
- 1825 岩倉具視誕生（～1883）
- 1828 西郷隆盛誕生（～1877）
- 1833 桂小五郎（木戸孝允）誕生（～1877）
- 1839 〈蚕社の獄〉 渡辺崋山、高野長英の死
- 1840～42 アヘン戦争（→南京条約）
- 1841 田中正造誕生（～1913）
- 1841 伊藤博文誕生（～1909）百姓の子として周防国に生まれる。父が足軽身分となったため、下級武士となった
- 1843頃 『夢酔独言』
- 1845 勝海舟、蘭学の修業を始める（二十三歳）
- 1845頃 英国海軍で外輪式からスクリュー型蒸気船への転換が始まる
- 1849 桂小五郎、吉田松陰の門下生となる（十七歳）
- 1850 勝海舟、私塾を開き蘭書を講じる（二十八歳）
- 1850 お由羅騒動
- 1851 島津斉彬（1809～58）薩摩藩襲封^{しゅうほう}
- 1852 桂小五郎 剣道修業のため江戸留学を藩に願い出て許される 江戸三代道場の一つ、斎藤弥九郎の〈練兵館〉で免許皆伝を受け、塾頭となる
- 1853（1月）岩倉具視、関白家で歌道修業を開始（二十三歳）、下級公家でありながら宮中政治への参画の可能性を得た

- 1853 (7月8日) 海軍提督マシュー・ペリー率いるアメリカ海軍東インド艦隊 (二隻の外輪式蒸気船、二隻の帆船) が浦賀に来航
- 1854 (2月11日) ペリー再来航 (蒸気船三隻、帆船三隻)
- 1854 (3月31日) 日米和親条約 (神奈川条約) 締結、6月、下田条約 (和親条約の細則) 締結、下田、箱館 (函館) の開港、鎖国の終焉
- 1854 (4月) 西郷隆盛、島津斉彬の〈御庭方役〉 (近習連絡役) となる
- 1855 (7月) 勝海舟、長崎の海軍伝習所へ
- 1856 (6月28日) アロー号事件
- 1856 (8月) タウンゼント・ハリス、アメリカ公使として下田に着任
- 1856～69 アロー戦争=第二次アヘン戦争 (→天津条約)
- 1857 (八月) 老中首座阿部正弘急死、堀田正睦老中首座に、条約勅許運動開始
- 1857 (12月) ハリス江戸入府、江戸城登城
- 1858 (3月) 堀田正睦の条約勅許使の入洛に際し、岩倉具視ら公家は集団で参内して勅許の不許可を求めた (〈廷臣八十八卿列参事件〉)
- 1858 (6月19日) 日米修好通商条約締結、不平等条約に収斂
- 1858 (7月10日) 日蘭修好通商条約、不平等条約
- 1858 (7月11日) 日露修好通商条約、不平等条約
- 1858 (7月18日) 日英修好通商条約、不平等条約
- 1858 (9月3日) 日仏修好通商条約、不平等条約、以上〈安政五カ国条約〉
- 1858～59 安政の大獄 (吉田松陰、橋本左内他斬罪刑死)
- 1858 (11月) 西郷隆盛、尊皇志士の僧月照と入水自殺をはかる。月照は死亡、西郷は蘇生
- 1859～62 西郷隆盛、奄美大島へ流罪 (これは井伊大老派の探索捕縛を避ける意味もあった)
- 1860 日本の蒸気船軍艦咸臨丸渡米 (勝海舟、福沢諭吉) 咸臨丸は幕府の発注でオランダの造船所で造られた。外輪式ではなく、すでにスクリュー式だが、練習船規模で、蒸気は港湾の出入りの時にのみ用いられた
- 1860 桜田門外の変 井伊大老暗殺
- 1861 (11月) 和宮降嫁 (孝明天皇異母妹) → 第十四代将軍家茂正室 = 公武合体の象徴
- 1862 (4月) 島津久光上洛
- 1862 (5月21日) 寺田屋事件 島津久光による薩摩尊皇派の粛清
- 1862～1864 西郷の二度目の流刑
- 1862 (9月) 生麦事件
- 1863 (5月) 伊藤博文、井上聞多 (馨) ら、英国留学 (〈長州五傑〉) 二人は翌年三月、下関戦争仲介のため急遽帰国した
- 1863 (8月) 薩英戦争
- 1863 (8月18日) 〈八月十八日の政変〉 攘夷委任派 (幕府、薩摩) の勝利、攘夷親征派 (長州、急進公家) の敗北 → 七卿落ち

- 1863～64 下関戦争（馬関戦争）
- 1864（3月）西郷の赦免召還
- 1864（6月5日）池田屋事件
- 1864（7月18日）禁門の変（蛤御門の変）
- 1864（9月）大坂にて勝と西郷の対談（初対面）、勝は幕府の内情を伝えた
- 1864（7月～11月）第一次長州征伐（西郷隆盛、征長軍参謀に任ぜられる） 長州藩、謝罪して禁門の変の責任者に自刃を命じた
- 1866（1月22日）薩長同盟成立
- 1866 第二次長州征伐 幕府軍の敗北（⇨奇兵隊の活躍）
- 1867～68 田中正造、〈六角家私闘争〉を指導
- 1867（5月21日）倒幕を目指す薩土密約成立
- 1867（6月22日）坂本龍馬の仲介により、薩土盟約成立
- 1867（10月）大政奉還
- 1867（12月9日）王政復古
- 1868（1月）鳥羽伏見の戦い
- 1868～69 戊辰戦争
- 1868（3月）江戸城無血開城（勝、西郷、山岡鉄舟）
- 1868（3月）五箇条の誓文
- 1869（5月）箱館戦争、五稜郭落城

2. 二つの勝海舟ブーム

- 聞き書き史料（『氷川清話』1898、『海舟余波』1899 → 『海舟座談』として1930年に再版）
- ① 日清から日露への過渡期における幕末維新回顧 → 足尾銅山事件
- ② 昭和期の明治回顧 → 近代化そのものへの問題意識

3. 聞き書きの史料性

- 編者による改竄の可能性はないのか
- 前近代の聞き書き的民間史料、伝記史料の信憑性に通じる問題
- 軍記物語の史料性を全否定した時代があった
（『太平記』を巡っての問題、『甲陽軍鑑』偽書説等）
- 〈肉声〉の史料性に意識を集中することで解決
- 『甲陽軍鑑』は口語言語の解析により、信憑性が再評価された
- 海舟の座談も似た位置にある（より個人的な口語のスタイル）
- 〈文体〉はつまりはエートスの外化した記号系である
＝ 語り口は人格の最大の徴表の一つである（肖像とならんで）
- したがって〈文体〉のオリジナリティに透けて見えるエートスが、歴史的一回性を発散しているならば、そこに改竄が紛れ込む可能性は非常に少ない
- 結論として、二つの聞き書きは幕末維新史の最高の一次史料である

4. 〈国権〉の伸張期（日清から日露）に第一次勝ブームがきたことの意味
- 幕臣への関心が目覚めた → 最大の幕臣であった勝
 - ⇔ 雄藩志士の退行形態としての藩閥政府 → その専制性に対する反発
 - 志士のエートスとは異なるエートスの系譜を勝に認めた
 - 江戸期の〈下情を知る名奉行〉の系譜
 - 大岡越前 → 長谷川平蔵 → 遠山景元の系譜
 - 特に〈不良旗本〉の社会環境と重合することが多い（鬼平、金さん、勝）
 - 勝ち誇る近代（維新の元勳） ⇔ 消え去る封建（幕臣たち）という皮相な二項対立ではない
 - 勝たちに、藩閥的近代が実現しえなかった、民本的為政の貫徹を認めたことに、民衆的心性の正しい直感があった
 - 明治的近代において抜け落ちていく民衆、下情への眼差し
5. 勝海舟のエートス形成の示準性
- 雄藩志士に比べて〈一身二生〉的な自己分裂に近い画期は希薄
 - より連続的なエートス形成が認められる
 - しかしそれはまた幕末維新と共振し続けた
 - 蘭学 → 〈国家主義〉の系譜は、公人としての彼の本質
 - しかしエートス形成の基礎は〈剣と禅〉であった（引用1）
 - 剣豪男谷信友は年長の従兄弟
 - 信友が世話をした島田虎之助が師、〈精神修養としての剣〉

引用1

〈本当に修行したのは、剣術ばかりだ。全体、おれの家が（※男谷の本家を指す）剣術の家筋だから、おれのおやじも、骨折って修行させようと思って、当時剣術の指南をしていた島田虎之助という人についた。この人は世間なみの撃剣家とは違うところがあって、始終、「いまどきみながやりおる剣術は、型ばかりだ。せつかくのことに、足下は真正の剣術をやりなさい」といっていた。〉（『氷川清話』〈本当にしたのは剣術修行〉、209p）

6. 勝の〈平和主義的剣法〉と志士たちの〈道場剣法〉
- 勝は師資相承タイプの古い剣道修行で、幕末の道場剣法とは疎遠だった
 - 精神修養としての剣禅（引用2）
 - しかし剣を通じてのネットワーク形成には長けていた
 - 勝も父の小吉も人を斬らないことを信条にしていた（引用3）
 - 気合いと〈てどり〉の剣法（引用4）
 - 斬ろうとして行き、意気投合する（勝と龍馬、板垣と武市等）
 - 幕末的コミュニケーションの型

- 〈喧嘩〉のネットワーク形成力に似る
- 江戸下町で生きた〈不良旗本〉の生活感覚から生じた平和主義

引用 2

〈修行の効は瓦解（※維新のこと、幕臣風の用語を用いている）の前後にあらわれて、あんな艱難辛苦に耐ええて、少しもひるまなかつた。〉（同上）

引用 3

〈今とは違って、昔は世の中は物騒で、坂本も広沢も切られてしまい、おれもしばしば危ういめにあった。けれどもおれは、常に丸腰でもって刺客に対応した。あるとき長刀を二本さしてきたやつがあるので、おれは「お前の刀は抜くと天井につかえるぞ」といってやったら、そのやつはすぐ帰ってしまった事があった。……こういうふうにおれは一度も逃げもしないで、とうとう切られずに済んだ。人間は胆力の修養がどうしても肝心だよ。〉（『氷川清話』〈丸腰〉、257p）

引用 4

〈こうやっていて（※巖本と対面するような形でいて）斬りつけられたことなどは、^{たびたび}度々あったが、いつでもこちらは抜いたことはない。始終、^{でどり}手捕にしたよ。だが先生方がその真似をしたら、直きに斬られてしまうよ。〉（『海舟座談』、90p）

7. 生活のエートス → 困窮を通じて下情を知る → 〈名奉行〉の修業時代
 - 黒船来航の折の意見書が阿部正弘の目にとまり、二年後に翻訳方として役職を得る（三十三歳までは貧窮の生活を送った）
 - 貧乏を受け流す能力、その中で自分を磨く能力は下級武士、軽禄の旗本御家人に共有された〈士分のいき〉の伝統であった
 - その貧窮を通じて、下情を身近に知ることになる
 - この修練が〈名奉行〉タイプの民本的為政者の前提となった

8. 江戸期の奉行、与力は権力と民が接する境界に位置していた
 - 酷吏と名奉行への二項分岐（鳥居耀蔵⇄遠山景元）
 - 両者ともに能吏ではあったが、それは幕藩的制度の非・合理性からして、定常項ではなかった
 - むしろ民本をめぐる分岐が本質的である
 - 勝は貧乏を受け流し、節を護る生き方をすることで、自然に名奉行タイプへと接近していった

9. 勝の蘭学的定位 → 近代的合理精神の主體的獲得

- 〈蛮社の獄〉(1838年)以降の抑圧の現実に適応
- 砲術、軍学、軍事技術の翻訳紹介に特化
- 佐久間象山(1811~52)に弟子入り(義兄となる)
- 象山は儒学的経世を基礎として、蘭学を実学として学んだ
- 象山の経世はオーソドックスに封建イデオロギー的であり、杉田玄白や高野長英に見られた経世における合理性は見られない(大義名分 → 大言壮語)
- 勝にはこの儒学的素養がほとんど欠如している(いきなり蘭学に入った)
- 勝の合理主義は蘭書の乱読(→ 渋田利右衛門の援助)、また同時代の〈時勢〉に対する鋭敏な感覚によって培われた
- 経世の感覚を合理化することにより、近代国家の理念に到ることができた
= 勝の〈国家主義〉
- 近代的合理主義の〈水中花〉が自己展開した一つの例(第二章第五節)
- 蘭学以外の学問的蓄積が欠如していたことがプラスに働いた
- 彼は元々「本を見るのは嫌い」なたちだった(しかし自覚的に相当量の情報をこなす読書家、あるいは速読家になっている)
- 最先端の学問体系(合理的軍学)が与える衝撃をそのまま受け取った
- 福沢諭吉の〈白紙の脳〉論に近い状態(『西洋事情』→ 『全集緒言』)

10. 勝の受容力、先端的システムの理解力 → 咸臨丸渡米となって結実

- 咸臨丸の渡米は黒船来航からわずか七年後(1860年)であり、それは一つの〈偉業〉だった(福沢の証言)(引用5)
- 長崎奉行、海軍伝習所教頭格としての勝の功績
- 勝は黒船来航の意見書で世に出た人物であり、まさに咸臨丸渡米はその最初の集大成だった

引用5

〈しかしこの航海については、大いに日本のために誇ることがある、というのは、そもそも日本人が初めて蒸気船なるものを見たのは嘉永六年、航海を学び始めたのは安政二年(※すなわち勝が指揮する長崎の海軍伝習所において)のことで……その業なって、外国に船を乗り出そうということを決したのは安政六年の冬、すなわち目に蒸気船を見てから足かけ七年目、航海術の伝習を始めてから五年目にして、それで万延元年の正月に出港というその時、少しも他人の手を借らずに出掛けて行こうと決断したその勇氣といい伎倆といい、これだけは日本国の名誉として、世界に誇るべき事実だろうと思う。〉(福沢諭吉『福翁自伝』〈日本国人の大胆〉、111p)

11. 勝の東西書籍に対するバランス感覚

- 蟄居時に「朝は西洋、昼は漢書、夜は日本の雑書」を続ける（引用6）
- 江戸下町のバランス感覚
- 小吉の訓戒 → 「野郎の本箱字引になるべからず」（引用7）

引用6

〈若い時は、本が嫌いで、手紙でも書きはしなかった。元、剣術遣いの方だからネ。四年ほど押し込められている時に（※はっきりとした蟄居は1864年から66年までだが、その前後は不遇であったから、その期間も入れているようである）、隙でしようがないから、読み出したのサ。朝は西洋サ、昼は漢書、夜は日本の雑書で、たいてい読んだよ。漢文は今でも読めないよ。西洋学者だから、字引で読むのサ。四年やった時に、そう思ったよ。もう四年もやれば、よほどの学者になる。本読みになるのは、楽なものだと、そう思ったよ。〉（『海舟座談』90p）

引用7

〈数巻の書物をよんでも、心得が違ふと、野郎の本箱字引になるから、ここを間違はぬよふにすべし。武芸もそふだ。ぶこつの業を学^{まなぶ}と、支体（※肢体）かたまりて、野郎の刀掛になる故、其の心すべし。〉（『夢酔独言』、10p）

12. 近代化をめぐる、勝の功績

- ① 海軍操船の伝習 → 民間の商船も視野に → 龍馬の「海援隊」
- 総合的な海運との連携、近代的合理精神が薩摩海軍閥においては鈍磨
- 長州陸軍閥との予算の分捕り合戦へ
- ② 江戸城無血開城 → 西郷との面識、相互理解が生きる
- ③ 旧幕臣の静岡組の生活を成り立たせたこと（引用8）
- この功績は莫大に大きい（西南戦争との比較）
- 慶喜の経世面での無能、外交感覚のなさを補填し続けた
- フランス外債の誘惑を拒否（引用9）
- 列強外債と植民地化の内的連関をはっきりと認識
- 慶喜の外交権留保が大問題になりかけた時もうまく尻拭い
- 宮中の祭政一致派から仇敵視される

引用8

〈三十年来（※維新以来）徳川一門を固めて置いた。皆なオレの言う事を聞くから、マサカの時には国家の御用をする事の出来るようにしてある。〉（『海舟座談』204p）

引用 9

〈フランスから金を借りるという事では、己は一生懸命になって、とうとう防いでしまった。もしあれが出来ておろうものなら、国家に対して何と申訳があるエ。〉(『海舟座談』、170p)

13. 〈名奉行〉と〈下情〉

- 下層旗本にとって、庶民はすぐ隣の存在であり、役職ははるか彼方だった(勝小吉)
- 士大夫の上昇志向は、〈下情〉を切り捨てることがあった(徂徠の例)
- 勝小吉が農事を勧めたこと、小者には貧乏人を雇い、年季があける時には一人前の生活ができるようにという家訓を残したことも、この庶民との生活の近さがある
- 勝は〈下情〉を知るために街を散策する習慣を身に付けた(引用10)
- その知識が維新前後に非常に役にたった(引用11)
- 明治に入ると〈裏店社会〉(下層社会)に強い関心を持つ(引用12)
- 「社会問題」の実情を探るため
- 戊辰戦争の折には〈ならずものの糾合〉にとりかかった(引用13)
- 粗末な駕籠、直接出向くなど、細かな気配りが功を奏す
- 治安維持のため → 大火や無政府状態は起きなかった

引用 10

〈おれが長崎にいたころに、教師から(※おそらくオランダ人教師)教えられたことがある。それは「時間さえあれば、市中を散歩して、何事となく見覚えておけ。いつかは必ず用になる。兵学をする人はもちろん、政治家にも、これは大切なことだ」と、こう教えられたのだ。〉(『氷川清話』、同上、248p)

引用 11

〈その後、どこへ行っても、暇さえあれば独りでぶらついた。それゆえ、東京の市中でもたいてい知らない所はない。日本橋、京橋の目抜き所、芝や下谷^{したぎ}の貧民窟、本所、深川の場末まで、ちゃんと知っている。そしてこれが維新前後に非常にためになったのだ。〉(同上)

引用 12

〈いつかおれは、紀州侯のお屋敷へ上った帰り途に、裏店社会へ立ち寄って、不景気の実情を聞いたが、このさき四、五日の生活が続こうかと心配しているものが諸方にあった

よ。ひっきょう社会問題というものは、おもにこの辺から起こるのだから、為政家は、始終裏店社会に注意していなければならないよ。〉(『氷川清話』、同上、256p)

引用13

〈官軍が江戸城に押し寄せて来たころには、おれも大いに考えるところがあって、いわゆるならずもの^の糾合にとりかかった。それは、ずいぶん骨が折れたよ。毎日役所からさがると、すぐに四つ手駕籠(※竹で組んだ粗末な駕籠)に乗って、あの仲間で親分といわれるやつどもを尋ねてまわったが、骨が折れるとはいうものの、なかなかおもしろかったよ。

「貴様らの顔を見こんで頼みこむことがある。しかし貴様らは金の力やお上の威光で動く人ではないから、この勝が自分でわざわざやってきた」と一言言うと、「へえ、わかりました。この顔がご入用なら、いつでもご用にたてます」というふうで、その胸のさばけているところなどは、実に感心のものだ。

官軍が江戸へは行って、しばらく無政府の有様であったときにも、火つけや盗賊が割り合いに少なかったのは、おれがあらかじめこんな仲間のやつを取り入れておいたからだよ。〉(『氷川清話』同上、185p)

14. 専制的〈君子微行〉 ⇔ 名奉行の〈下情探索〉

- 専制君主の〈覗き見〉(秦始皇、家光?)
- 福沢諭吉は密偵政治と結びつけている(引用14)
- 明治的専制も密偵を活用した(福沢自身も監視された)
- 名奉行と専制密偵は下情の視察において隣り合う
- 〈寄らしめるべき民〉の観念
- しかし根本の精神は専制⇔民本の対極性を示す
- 名奉行は幕藩体制の緩衝材だが、主体的に出現する為政範疇である
- それは〈封建的反動の延命〉ではない

引用14

〈また、古史に国君微行して民間を廻り、童謡を聞いてこれに感ずるの談あり。何ぞそれ迂遠なるや。これ

は往古の事にて証するに足らざれども、今日にありて正しくこれに類する者あり。即ちその者とは独裁の政府に用る所の間諜、これなり。政府暴政を行うて民間に不服の者あらんことを恐れ、小人を遣て世間の事情を探索せしめ、その言を聞いて政を処置せんと欲するものあり。この小人を名けて間諜という。〉(福沢諭吉『文明論之概略』、112p)

15. 明治的専制にはこの名奉行的為政エートスが当初から欠如していた

- 雄藩有司たちは下級武士出自だが、庶民の生活感覚を制度に持ち込むことはしなかった
- 合理主義のみで、民本性が欠如
- 松蔭の〈草莽〉理念は、民衆に接近したが、しかし〈下情〉の生活感覚は彼においても欠如していた
- 抽象的一般性に留まった → それゆえにまた国民理念の先駆型ともなる

16. 勝は前近代的民本性（名奉行的エートス）と近代的合理主義を融合させたところに、自らの為政者としての理念を求めた

- この総合性が明治的為政には決定的に欠如していた
- 近代化の弊害が顕在化する過程で、制度は強権的機能不全を起こした
- その最初の最大の症例としての足尾銅山鉍毒事件
- 勝は当初から政府の対応（無視、弾圧）に批判的で、田中正造の活動を高く評価していた
- 明治以来の役人にどれほど〈名役人〉がいたか、〈名奉行〉との差異は歴然としている
- 鳥居耀藏の系譜（封建的酷吏）の系譜だけが根絶されずに残ってしまった（三島通庸、品川弥二郎）
- 近代的官僚制における民本性の欠如の本当の原因は何だったのか
- 勝が身を以て示したのは、江戸公人的定位の、明治期における残存型、その可能性であったと総括できる

（近代本論第二十回キーワード終わり）